メキシコ，ベラクルス中部地方の エル・タヒン文化の 考古学および文化人類学的研究

桜　井　三枝子
黒　崎　　充

全体要旨

本稿では，第一部においてエル・タヒン文化を代表する考古資料から，黒崎充がその特徴となる球儀について，考古資料の地理的分布と出土状況を比較し考察を行う。この紹介をふまえたうえで，第二部では，桜井がエル・タヒン遺跡を包含するベラクルス中部地方のトトナカ文化圏に関する文化人類学的研究について述べていくものとする。

第一部　エル・タヒン遺跡を中心としたベラクルス中部地方北地域の古代文化
――タヒン様式と球儀に関する要素の拡がりについて――

黒崎　充

第一部要旨

本稿第一部では，タヒン文化に代表されるいわゆるタヒン様式と呼ばれる考古学資料の中から，建築様式・球儀場・球儀に関係したとされるくびき型石製品（ユーゴ）・版状石製品（アチャ）・棕櫚形の石製品（パルマ）と呼ばれる石製品の出土状況と地理的分布をもとに，その様式の拡がりについて考察を試みた。その結果，タヒン文化をもっとも特徴付けるものは球儀であり，タヒン様式はベラクルス州中部北地域に拡がっており，とりわけナウトラ川流域にかけて分布する。エル・タヒン遺跡とそれ以外の遺跡において見られるタヒン様式は，時期によって双方にこの様式を取り入れた可能性があると考えられる。

目次

はじめに
1　エル・タヒン遺跡の概要
2　タヒン様式について定義とその内容
3　壁がんをもつピラミッド，傾斜壁に支えられたひさしをつける建築様式，雷文様
4　球儀に関する資料
　4.1.　球儀の様子と首を切る人身犠牲の様子が描かれた資料
　4.2.　ユーゴ・アチャ・パルマの資料の分布と出土状況の比較
　4.3.　球儀場
おわりに

は　じ　め　に

メキシコ湾岸の古代文化，とりわけベラクルス州湾岸部にて南部地方ではメソアメリカ（Mesoamérica）における最初の古代文化であるオルメカ文化（La cultura Olmeca）が先古典期前期（紀元前1200年から紀元前400年）に発展した。一方，ベラクルス州北部地方では，ワステカ文化（La cultura Huasteca）が同じく先古典期から後古典期まで栄えた。そして，ベラクルス州中部地方は，1519年にスペイン人征服者コルテスの一行が上陸し，現地のトトナカ語族（Los Totonacos）の太った首長と会見した。そこは当時の情報を集めたセンポアラ（Zempoala）遺跡の位置するところである。

エル・タヒン（El Tajín）遺跡は，トトナカ語族がいたとされるこのベラクルス州中部地方と州北部地方の境に位置し，現在トトナカ語を話す人々が遺跡周辺に住んでいる。現代にトトナカ語を話す人々が住んでいることから，エル・タヒン遺跡はトトナカの文化だと一般に考えられているが，この遺跡が栄えていた古典期後期末から後古典期前期（紀元後800年から1200年）においてもトトナカ語族が暮らしていたかどうかは分からない[1)]。

しかし，長年の発掘調査および資料の研究によって，タヒン様式と呼ばれる建築・モチーフ・石製品などが，エル・タヒン遺跡を代表するものとして定義された。また，現在まで，メキシコ人類学調査研究所のベラクルス・センターやベラクルス州立大学人類学研究所やメキシコ国立自治大学の研究者によって，エル・タヒン遺跡および周辺部の調査が行われ，考古学資料が増えている。こうした資料をもとに，本稿ではタヒン様式の拡がりについて，とりわけ球儀[2)] に関係する資料の地理的分布および出土状況の比較をもとに考察を行う。

1　エル・タヒン遺跡の概要

エル・タヒン遺跡は，メキシコ合衆国ベラクルス州中部地方北地域に位置し，おおよそ８世紀から12世紀に栄えたとされている（Brüggemann 2001: 26）（図１）。遺跡は，標高400ｍのところに位置し，東西を流れる二つの川に挟まれるかたちで南北に伸びた台地に立地している。また，台地上南部から北部にかけて少し小高くなっており，その小高いところに，権力者やエリート集団が居住したとされている。遺跡全体は，105,555 m^2 で168の建造物が確認されている（Brüggemann 1994b: 57）（図２）。ピラミッドの配置から，遺跡は３つの基本軸をもとに３時期において拡大発展したとされる。当時の人口は，推定

1）一般に，メソアメリカ古代文化において，エル・タヒン遺跡はワステカ文化とトトナカ文化の境界線上に位置している。考古学研究からは，エル・タヒンの文化がワステカ文化なのかトトナカ文化なのかあるいは両方の文化を含むものかいまだに議論の分かれるところである。例えば，ジェフリー・ウイルカーソン（Jeffrey Wilkerson）は，エル・タヒンの起源はワステカ文化にありとしている（Wilkerson 1987: 23）。

2）『球儀（el juego de pelota）』の訳について『球技』，『球戯』と訳すものが一般的である。本稿で取り上げるものは，儀礼としての要素が見られるため，『球儀』という訳語で統一することにする。

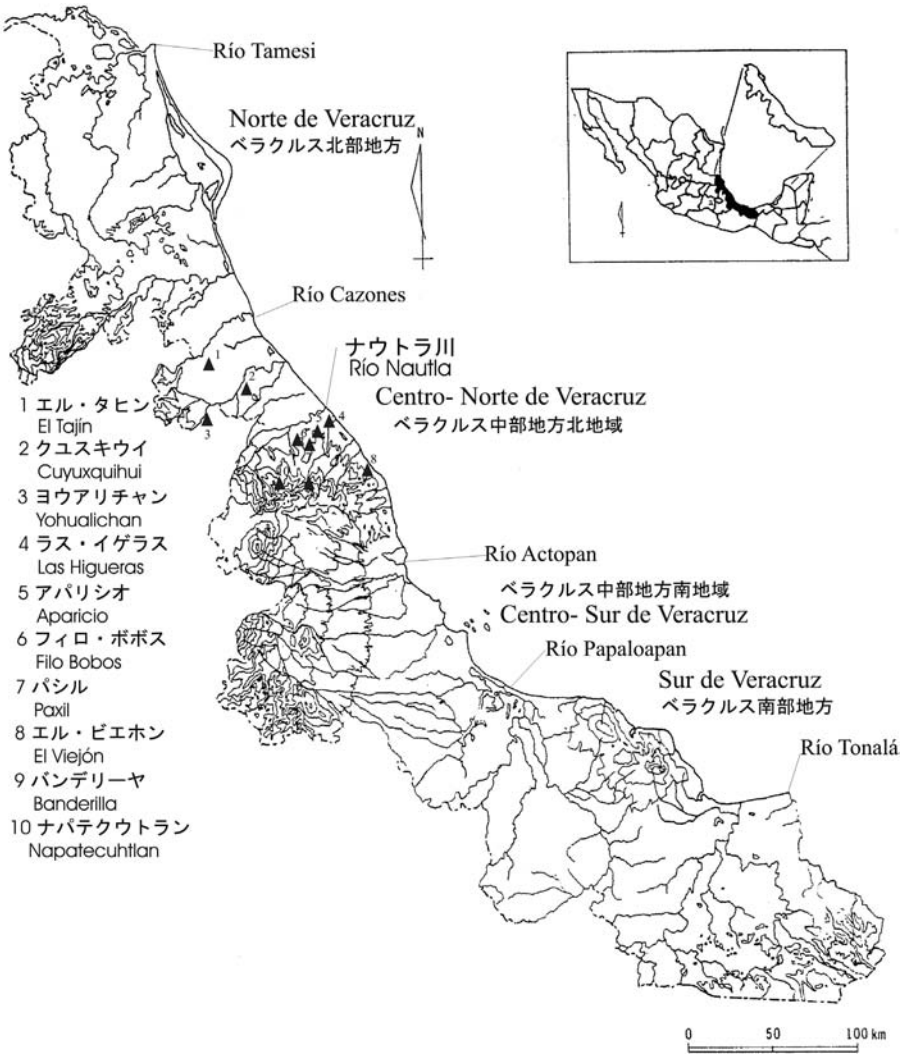


図１　ベラクルス州中部北地域遺跡分布図（本稿で紹介した遺跡）

（Atlas Geográfico del Estado de Veracruz 1992 より作図）

で１万５千人から２万人であったと考えられている（Brüggemann 1994b 57）。

エル・タヒン遺跡は，全部で17基の球技場が確認されており，とりわけ北の球技場および南の球技場には浅浮き彫りで儀礼の様子が描かれている。また，この浮き彫りやそのほかの石碑において交錯文や渦巻き文が多く施されていることでも良く知られている。

なお，1992年に先スペイン期の古代文化遺跡としてはメキシコ国内で第５番目の世界文化遺産として登録がなされた[3)]。

3）エル・タヒン遺跡と世界遺産の関係する資料については，拙稿「地元のシンボルとしてのエル・タ

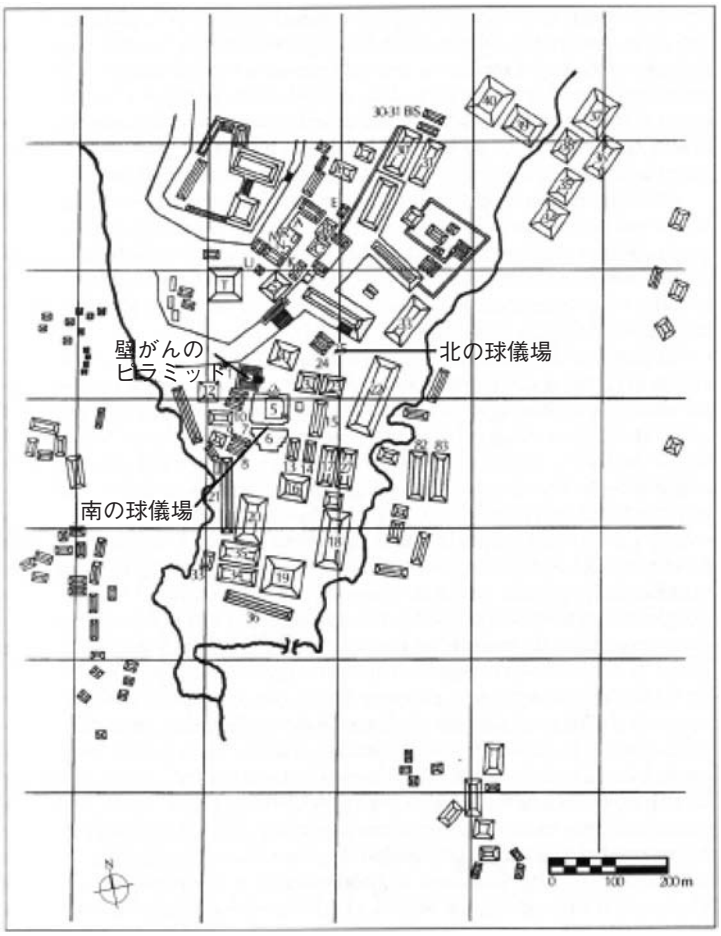


図２　エル・タヒン遺跡地図

（Brüggemann, Jürgen K. 2001: 27, Figura 5 より）

遺跡の調査は，ホセ＝ガルシア・パヨン（José Gracía Payón）によって1938年から発掘調査がなされ，1990年にユルゲン＝ブルグマン（Jürgenn Brüggemann）に引き継がれ，現在はパトリシア＝カスティージョ（Patricia Castillo）によって調査が続けられている（Castillo 2008 発表資料より）。こうした研究調査例をもとに，以下タヒン様式と呼ばれるものについてその定義のもとになる資料について検討する。

2　タヒン様式について定義とその内容

タヒン様式（Tajin Type）という用語を使用したのは，エレン＝スピンデン（Ellen Spinden）である。1933年にエル・タヒン遺跡を訪れた際に確認した資料から，特徴のあ

ヒン遺跡：先スペイン期の遺跡と現代における遺跡活用について」『共生の文化研究３』参照。

る建築・図像・石製品：ユーゴ（Yugo），パルマ（Palma）・土器資料をまとめタヒン様式とした（Spinden 1933）。

彼女の見解は，その当時発見されたマヤ文化の資料と比較して，エル・タヒン遺跡での資料との類似を指摘した。ここで明らかにされた「動き」を示すオリンのモチーフが繰り返し球儀場の浮き彫りに描かれているとしたことは，ここで行われた球儀を解釈する上での出発点となった（Piña Chan y Castillo 2001：108）。

この後，1952－53年にタティアナ＝プロスコウリアコフ（Tatiana Proskouriakoff）が，スピンデンと同じく，当時のマヤの資料と比較をし，とりわけそのモチーフとなる「交錯文様（渦巻き文様）」を中心にタヒン様式のモチーフとして提示した（Proskouriakoff 1952-53：389）。この交錯文様あるいは渦巻き文様は，その後も各地域の資料から見つかっており，バルバラ＝スターク（Barbara Stark）の詳細な文様の検討によって，渦巻き文様の始まりは先古典期末からベラクルス州中部地方南地域において見つかっているとされている。そして，テオティワカン（Teotihuacan）においてもその模様が見られ，テオティワカンにおいてはオアハカ（Oaxaca）地方の渦巻き文と組み合わされた渦巻き文が作り出されたと考える（Stark 1998）。

プロスコウリアコフの研究において，交錯文様・渦巻き文が施された資料として，ユーゴやパルマをとり上げており，彼女は後にこれらの二つにアチャ（Hacha）などを加えてベラクルスにおける美術様式の顕著なものであると資料の集大成を行った（Proskouriakoff 1952-53, 1954, 1971）。本稿においてもこの三つの資料（ユーゴ，アチャ，パルマ）についてその出土状況と分布について比較し考察を加える。

一方，ガルシア・パヨンは，発掘調査出土資料をもとに建築様式を含めタヒン様式を以下の三つの要素を中心に定義した（García Payón 1951：13）。

a　壁がんを施したピラミッド

表１　タヒン様式の要素一覧

番号	遺跡名	壁がん	ひさし	雷文様	渦巻き文様	球儀場（軸方位）	球儀の様子	ユーゴ	パルマ	アチャ	主要時期	出典
1	エル・タヒン	●	●	●	●	●（東西）	●	X（破片）カエル	（X）		古典期後期―後古典期前期	Brüggemann 1994a, 1994b, 2001; García Payón 1950：63
2	クユスキウイ					●（南北）		X（破片）カエル			後古典期前期	Ruiz Gordillo 1984, 2010
3	ヨウアリチャン	●	●	●		●（南北）		X（破片）カエル		（X）	古典期―後古典期	Molina Feal 1980, 1986
4	ラス・イゲラス					●（東西）	●	X（破片）カエル	X（破片）		古典期後期	Arellanos 2006,
5	アパリシオ					●（？）	●				後古典期	García Payón 1949
6	フィロ＝ボボス		●	●		●（東西）			（X）	（X）	古典期後期―後古典期	Cortés 1994; Muños 1998; Ocampo 2002：24
7	パシル		●			●（東西）			▲（完形）		後古典期前期	Rui Gordillo 1999
8	エル・ビエホン					？		▲（完形）装飾なし		▲（完形）	古典期後期	Medellín Zenil 1960
9	バンデリーヤ				●	？			▲（完形）２点		古典期後期―後古典期	Arellanos y Beauregard 1981
10	ナパテクウトラン					●（南北）			▲（完形）		古典期後期―後古典期	Medellín Zenil 1975

（X）は記述によって確認されたもの。

b　交錯文様，渦巻き文様

c　ユーゴ，アチャ，パルマの資料

本稿では，この定義の中心となる資料とエル・タヒン遺跡で確認された独特の建築技法とシンボルとしての雷の文を対象として加え，比較検討していくことにする（表１）。

3　壁がんを持つピラミッド，傾斜壁に支えられたひさしをつける建築様式，雷文様

3a　壁がんを持つピラミッドは，エル・タヒン遺跡にもプエブラ（Puebla）州北東部クエツァラン（Cuetzalan）市より北東に７kmほどのところに位置するヨウアリチャン（Yohualichan）遺跡において確認されている（写真１）[4]。また，この壁がんのピラミッドの地理的分布はベラクルス州中部地方北地域に分布している。

写真１　壁がんを持つピラミッドの比較

（左：エル・タヒン遺跡１号建造物2008年12月　右：ヨウアリチャン遺跡中央建造物2008年11月）

3b　傾斜壁とひさしをつける建築様式

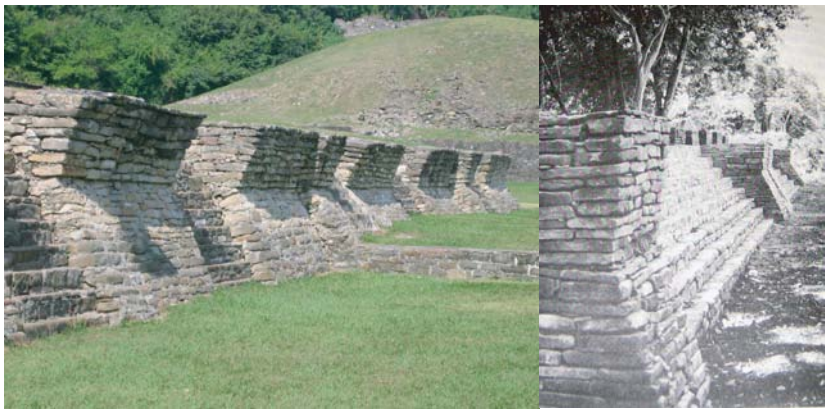
上記に加えてガルシア・パヨンが指摘するエル・タヒン遺跡で見られる独特の建築様式がある。これは，傾斜壁の上部にひさしのようにはりだしたもの（cornisa）をつけて建造物をつくるものである。この技法は，板状に切り出した石材をもちいて，その小口を傾斜面に向けて配置し，その上にひさし上に張り出しをつけるような技法である。これらの，板状に切り出した石材を用いたピラミッドが，エル・タヒン遺跡以外に，クユスキウイ（Cuyuxquihui）遺跡やパシル（Paxil）遺跡でも同様に築かれている（写真２）。

3c　雷の文様

また，建造物に施された文様の一つに雷文様がある。エル・タヒン遺跡では，タヒン・

4）壁がんのピラミッドは，そのほかにも，クエツァラン市内やコアツィントラ市内で確認されたとしている。本稿では，報告書や現地での確認が出来なかったため，取り扱わないことにする。

写真２　傾斜壁とひさしをつける建築様式



（左：エル・タヒン遺跡11号建造物基壇部2008年12月，右：パシル遺跡Ａ建造物基壇部 Ruiz Gordillo 1999: 116, Foto 18 より）

チコ（Tajín Chico）と呼ばれるエリート集団の住んでいたところで顕著に施されており，これと同じ文様が，フィロ＝ボボス（Filo-Bobos）遺跡や先にあげたヨウアリチャン遺跡においても中心部分に施されている（写真３）。

写真３　雷文様

（左：タヒン・チコＣ建造物2008年12月，中央：フィロ＝ボボス遺跡球儀場に施された雷文様（Cortés 1994b より），右：ヨウアリチャン遺跡球儀場北部に位置する雷文様の建造物2008年11月）

このようにエル・タヒン遺跡で顕著にみられる建築様式は，上記に述べた他の四つの遺跡でも見られ，それらの遺跡の分布はベラクルス中部地方北地域において集中している。そして，これらいずれもの遺跡には，すべてに共通するひとつの要素がある。それは，球儀場である。したがって，次にこの球儀場を含む球儀の様相について検討し，タヒン文化の特徴とは何かについて考えていく。

4　球儀に関する資料

エル・タヒン遺跡では，全部で17基の球技場が確認された。その中でも北の球技場と南の球技場には儀礼にかかわる様子を浅浮き彫りで施したものがある。ここでは，南の球儀場に描かれた球儀と人身犠牲の儀礼との関係について取り上げる。南の球儀場の中央部北東のパネルに人身犠牲の様子が描かれている（写真４上段）。まず，中央部の人物は，左にいる人物によって後ろ手におさえられ，その右側の人物が右手にナイフのようなものをもち中央の人物のちょうど首にあたる部分に当てている。これら３人の人物は，腰にベルトのようなもの（ユーゴ）をつけ，臍にあたる部分には前方部に突き出かたちの付属品（パルマ）を見につけている。ひざ当てのようなものも見につけており，これら一連の衣装から，球儀者が球儀上にて人身犠牲を行っているものと解釈されている（Wilkerson 1991）。これと同じように球儀者の首を切る形での人身犠牲を描いた石碑が壁がんをもつ１号建造物でも見つかった。ここには，斬られた首からおそらく７つの蛇が出る様子が描かれている（写真４下段左）。

4.1．球儀の様子と首を切る人身犠牲の様子が描かれた資料

この球儀場と球儀者と首を切る形での人身犠牲という同じ主題を描いた資料が，ベラクルス中部地方北地域とくにナウトラ（Nautla）川流域において見つけられている。ラス・イゲラス（Las Higueras）遺跡の主要となる１号建造物に多彩色で描かれたものは，先述のエル・タヒンの主題と類似している（写真４下段中央）。球儀場中央部で，球儀者が首を切られ，首から７匹の蛇が出ている様子が描かれている。切られた球儀者の首から７匹の蛇が出る様子を描いたものが，同じくアパリシオ（Aparicio）遺跡からも４つの石碑が確認されている（写真４下段右）。

これらをみると，球儀場で球儀者が首を切る形での人身犠牲を行い，切られた首から７匹の蛇が出る様子が共通していることがわかる。これらの資料の分布は点数は少ないものであるが，ベラクルス州中部地方北域にある。ラス・イゲラス遺跡では，球儀場と球儀者と首を切られ，７匹の蛇がそのいけにえとなった人物の首から出ている。アパリシオ（Aparicio）遺跡の石碑には球儀場は描かれないものの首を切られ，そこから７匹の蛇が出ている様子が描かれている。そして，エル・タヒン遺跡では，球儀場での儀礼の様子が南の球儀場から，球儀者の首から７匹の蛇がでる様子を描いた石碑が１号建造物から合わせて見つかっている。

球儀者に描かれている資料としてのユーゴ・アチャ・パルマ

球儀者の身につけているユーゴ・アチャ・パルマや球儀について図像から見てきた。考古学資料には，それらに相当するであろうとされる石製品がある。以下に，それらに関する出土状況について少し検討してみたい。

写真４　球儀と人身犠牲の様子

（上段：エル・タヒン遺跡南の球儀場の浅浮き彫り2010年11月，下段左：壁がんのピラミッド出土の石碑2010年11月，下段中央：ラス・イゲラス遺跡１号建造物に描かれた球儀と人身犠牲の壁画ハラパ人類学博物館2008年３月，下段左：アパリシオ遺跡出土の首を切られた球儀者を表した石碑同館2008年11月）（球儀場，球儀者，首を切る形で行われる人身犠牲，いけにえとされた人の切られた首から７つの蛇が生じる様子が描かれている。）

4.2．ユーゴ・アチャ・パルマの資料の分布と出土状況の比較

ユーゴ・アチャ・パルマの出土状況の類似について

本稿であげている10遺跡においてユーゴ，パルマ，アチャの出土状況の比較をし，考察を加える[5)]。ユーゴは，５遺跡から出土しており，そのうち４遺跡からは，カエルの意匠

5）ユーゴに関する出土状況の分析と考察については，拙稿「メキシコ湾岸地方におけるユーゴについて――ベラクルス州中部地方における発掘出土資料を中心として――」，『山口大学考古学論集』を参照。パルマとアチャの出土状況に関する詳細な比較検討は，また機会を改めて考察したい。

写真５　ユーゴ・アチャ・パルマ

（左：エル・ビエホン出土のユーゴとアチャ（Medellín Zenil 1960: 188, Lám. 110 より，中央：ナパテクウトラン遺跡出土のアチャハラパ人類学博物館2008年３月，右２点：バンデリーヤ遺跡出土のパルマ同館2008年11月）

を施したものの破片が確認されている。そして，エル・ビエホン（El Viejón）遺跡からは，完形であるが意図的に二つに破壊された形で，アチャを伴い埋葬とともに見つかっている（Medellín Zenil 1960: 188）（写真５左）。

アチャに関しては，先述したエル・ビエホンの完形の出土事例がひとつ，一方，ナパテクウトラン遺跡でのアチャも同じようにピラミッドの建設時に破壊された状態で埋納される形であったことが確認された（Medellín Zenil 1975）（写真５中央）。

パルマは，５遺跡から出土している。エル・タヒン遺跡ではその出土が確認されたのみだが（García Payón 1950: 63），パシル遺跡やバンデリーヤ（Banderilla）遺跡では完形のものが，フィロ＝ボボス遺跡では破片が，発掘調査によって確認された。興味深い点は，パシル遺跡においては，球儀場に隣接し，遺跡の主要部となるピラミッド建設時に埋納する形で完形で見つかっているものである。また，バンデリーヤ遺跡における緊急発掘事例においても，二つのパルマが意図的に破壊された状態であるが一括で見つかった（Arellanos y Beauregard 1981）（写真５右２点）。

このようにしてユーゴ・パルマ・アチャの出土事例を比較してみると，いずれも完形であるが意図的に破壊して，一緒に埋めるという共通した行為が確認できる。

4.3．球儀場

遺跡内での球儀場の配置と球儀場の方位に関する比較

上述した球儀に関する資料に加えて，球儀場も各遺跡に存在する重要な要素のひとつである。タヒン様式の要素を確認した10遺跡の中で，８遺跡に球儀場の存在が確認されている。これらの遺跡に共通するものは，石の環をつけていないものが特徴である[6]。これら

6）ただし，フィロ＝ボボス遺跡では，球儀場の中央部より穴の開いた石材が検出され，石環の代わりとして用いられた可能性があるとしている（Muños 1998: 22）。

８遺跡のうち球儀場の中心の軸の方位が，大別すると南北を軸とするものと，東西を軸とするものに分けることができる。これらは，時期の差によるもののほかに，上記のユーゴやパルマなどの出土地と関連があるように思われる。

たとえば，球儀場との配置と方位について，エル・タヒン遺跡南の球儀場からはユーゴ破片が出土した。この球儀場は基本軸を東西としている。傾斜壁をもつクユスキウイ遺跡でも球儀場があり，この軸は南北である[7]。パシル遺跡でもおなじく南北を軸に球儀場があり，球儀場の真北に位置する中心のピラミッドにはパルマが供物として検出された。一方，フィロボボス遺跡では，東西の軸をもつ球儀場が二つありそのうちのひとつからパルマが出土した。同じく，パルマが出土したナパテクウトラン遺跡でも，球儀場の存在が確認されており，南北を基準とする軸をもつ。

こうしてみると，タヒン様式の要素をもつ遺跡と中でも球儀にかかわる資料および球儀場の一連の様式は，タヒンを中心としたベラクルス中部地方北地域において拡がっている。

お　わ　り　に

これまでタヒン様式と呼ばれる資料を中心にその特徴と地理的な分布について検討を試みた。エル・タヒン遺跡において見つけられる壁がんのピラミッド，ひさし付きの傾斜壁，雷文様，球儀場や球儀と首を切るかたちでの人身犠牲の様子やユーゴ，パルマ，アチャという石製品の資料からエル・タヒン遺跡で見られる一連の要素を他の遺跡でも見出すことができる。17基の球儀場の存在だけでなく，このタヒン文化を特徴付けるものは，この球儀であったと考えられる。

そして，このタヒン様式の地域的な拡がりについては三つの解釈の仕方が可能である。ひとつは，これら一連の要素がそれぞれの遺跡からもたらされ，エル・タヒン遺跡において集約されたという考え方である。もうひとつの考え方は，エル・タヒン遺跡において確立された様式が，ここで観察した各遺跡へと拡がっていったという解釈である。また，三つめの考え方は，様式の一部はエル・タヒン遺跡へと取り入れられ，他の一部はエル・タヒン遺跡から他の遺跡へと拡がっていたというものである。筆者は，現時点において，この第三番目の考え方による。エル・タヒン遺跡自体が，３時期において拡大していったこと，中でも，はじめの時期からピラミッドに壁がんを施したものであること，他の遺跡の機能した時期が古典期後期に繁栄したものと後古典期において繁栄したものとあることからエル・タヒン遺跡の繁栄の時期と前後するところが確認できるからである。

このようにして，これまで観察してきたことについて大きく以下の三つにまとめることができる。

１　タヒン様式の分布をベラクルス州の考古資料から見ると，中部地方北地域において分布していることがわかる。取り分け興味深いのは，首を切る形での人身犠牲の関

7）このクユスキウイ遺跡調査者のルイス・ゴルディージョ（Ruíz Gordillo）によると，最近の調査でカエルの意匠を施したユーゴの破片が発掘で検出された（Ruiz Gordillo 2010年11月発表資料にて）。

係する球儀の様子がモチーフとして共通して描かれているところである。

２　これら建築様式と球儀にかかわる資料（ユーゴ・アチャ・パルマ）の分布をみると，中部地方北地域でもエル・タヒン遺跡から海岸部ナウトラ川流域から内陸部ミサントラ地域においてタヒン様式が拡がっていることがわかる。

３　そして，ユーゴ・アチャ・パルマの出土状態からは，破壊をして一括で埋納するという事例が共通して見られる。

本稿では，エル・タヒン遺跡およびその特徴について大まかな枠組みを提示することを試みた。この機会に，より多くの人にメキシコ湾岸の古代文化や人類学について興味を持っていただければと願っている。

謝辞

大学卒業後，1997年エル・サルバドルのチャルチュアパ遺跡調査（京都外国語大学　大井邦明団長）に参加した時から現在に至るまで，現地にて人類学研究に関するご指導を桜井三枝子先生に頂きました。また，2006年まで勤めていたベラクルス州立大学と大阪経済大学との交換留学制度を提携することによってメキシコと日本との長く深い学生交流が始まったのも，桜井先生および当時の国際交流課・栗林知美課長の献身的な取り組みによるものでした。研究のみならず多くの面で励ましやご指導をいただいた桜井三枝子先生に心より厚くお礼を申し上げます。

第二部　トトナカ文化圏に関する文化人類学的研究

桜井三枝子

第二部要旨

はじめに

エル・タヒン遺跡に地理的に近く植民地時代から続くサンタマリア・デ・パパントラ市（現在の人口：約15万人）は，1910年にパパントラ・デ・イダルゴと呼ばれ，さらに1935年にパパントラ・デ・オラルテという名称に変り現在に至っている（写真６，写真７，写真８，写真９，写真10）。第一部で遺跡に関する考察が黒崎によりなされたので，第二部では遺跡周辺地域では，現代においてもトトナカ語を話す人々が住んでいることから，トトナカパン地域に関する先行研究と歴史的背景について，民族学的資料に基づき明らかにするものである。

はじめに
１．概観
　1-1．トトナカに関する先行研究
　1-2．風土と言語
２．歴史的背景
　2-1．征服と植民
　2-2．反乱，独立，現代
3．民族誌
　3-1．生業，社会組織，交通
　3-2．宗教，祝祭，年事暦
　3-3．他部族との関係
あとがき

1．概　　観

トトナカに関してすでに発表された文化人類学的先行研究について調べ，次に当該地域の風土と言語に関する概説をこころみる。

1-1．トトナカに関する先行研究

テキサス大学出版の『中米インディアン・ハンドブック』第８巻「民族学」第二部（1969年）にはハーヴェイとケリーにより「トトナカ」に関する民族学の全般的解説がなされており，当該地域の民族学初学の者が最初に手に取る資料であろう。ナバロクによる『メキシコ，プエブラ州のトトナカ共同体におけるプロテスタンティズム』は，1987年に国立先住民庁から出版された。そして，故ロレンソ・オチョア編集の『ワステコとトトナカ』（1990年）には，以下７人による論考が寄せられ注目させられる。サアグンの「トトナカとは誰をさすのか」，ガルシア・パヨンによる「トトナカパンの歴史的発展」，アンヘル・パレルモ「トトナカパン地帯の自然誌とメキシコ東部のトトナカに関する古い民族誌」，クリッケバーグ「トトナカの歴史・文化的考察」，ウィルカーソンによる「中央ベラクルス北部の現代ワステカと文化的クロノロジー」，クロスター「エルタヒンの生活様式」，ワンダーリィによる「ソケ語とマヤ語系に近接するトトナカ語系言語の関連性について」[1)]。

1990年にプエブラ州シエラ地域の二共同体の調査をしたロルダンが，「トトナカの婚姻における社会的状況」を報告した（1993年）。同年には，チェノーの「トトナカ沿岸部――ポルフィリオ時代における離婚と社会」，エスコバルの「ワステカにおける社会運動の原因と進展」が著され，後に彼は『メキシコ海岸部から山岳部に至るワステカ先住民史，1750～1900年』（2001年）を説得力のある筆致で描いた。ガルマとマスフィラー共著（Garma y Masferrer）による「トトナコ人」が国立先住民庁（INI）から1995年に発行され，その民族誌は前述ハーヴェイとケリーによる概説（1969年）を時代的に補てんしてい

1）　調査期間：2008年３月と2009年12月末にベラクルス州ハラパ市経由でエルタヒン遺跡を訪問し，特に2009年にはパパントラ市に滞在して年末行事の慣習を参与観察した。五次勝氏ご一家には大変お世話になり感謝している。
Harvey H.R. and Isabel Kelly, “The Totonac”, in *Handbook of Middle American Indians,* Vol. 8, Etnology, Part 2, University of Texas Pres, Austin; 1969, pp. 638-681; Navarrok Carlosk, Garma, *Protestantismo en una comunidad totonaca de Puebla, México,* INI, 1987; Lorenzo Ochoa, *Huaxtecos y totonacos,* Consejo Nacional para Cultura y las Artes, 1990 において以下の論考７点が刊行された。Sahagun; ¿Quiénes eran los totonacos? Garcia Payon, José; Evoloución histórica del Totonacapan; Angel Palerm; Las zonas naturales del Totonacapan, Etnografia antigua totonaca en el oriente de México; Krickerberg; Consideraciones historico-cultrales de los totonacos; Wilkerson, Presencia huasteca y cronología cultural en el norte de Veracruz Central, México; Kroster; La forma de vida en El Tajin; Wonderly; Sobre la propuesta filiación linguística de la familia totonaca con las familias zoqueana y mayense. なお，筆者にとってワステカ研究は初学に近く，1999年調査の成果は，桜井三枝子「テネク・マヤ（ワステカ）文化に関する予備的研究」『大阪経大論集』第53巻第５号，2003年，245-272頁において報告した。

る。また，ワステカ史に関する著作の多いペレス・セバーリョ（Perez Zevallos）の指導下，国立人類学歴史学大学学生マリーンによる学士論文「18世紀パパントラにおける商品のレパルティミエントと反乱」には，現代パパントラ地域でのフィールド調査の報告がCD-Rom 版として発行されており参考になる。ところで日本人によるトトナカ地域の文化人類学的研究が，以下のように少ないことにあらためて気付かされた。黒崎充による「地元のシンボルとしてのエル・タヒン遺跡」（2009年）と小林致広による「先住民文化遺産」の観光商品化――クンブレ・タヒンの事例から」（2009年）と「タヒン・サミットとボラドール」（2010年）と題した研究発表がいずれも観光というテーマでなされている[2)]。

1-2．風土と言語

トトナカ人は南北にプエブラ州とベラクルス州の，東西にシエラ・マドレ山脈からパパントラ低地にいたるトトナカパンと呼ばれる地域に居住している。言語はプエブラ州のメカパラパのムイニシカン（Muinixcan），プエブラ州山岳部からメキシコ湾岸部までのサカトラン（Zacatlan）やパパントラ（Papantla），そして南部と南東のミサントラ（Misantla）に三別される。シエラ・デ・プエブラ地域は台地で寒く霧が吹き樫や松の植生がみられる。一方低地の海岸部は暑く湿気が多い。こうした風土の相違は農耕暦や基本的な経済活動，住居形態，民族衣装，食糧などに相違がでてくる[3)]。

言語学者たちによると，トトナカ語はテペウア語と共にトトナカ語族に属し，マクロマヤ幹語の一部をなす。しかし，ナワ語集団の侵入によりナワ語とトトナカ語の二言語話者も多い。以下は，1940年代のベラクルス州とプエブラ州におけるトトナカ語話者人口（90,378人）に関するハーヴェイとケリーによるデータである。この内の59,506人がトトナカ語しか話せないモノリンガルであった。1960年のセンサスによればベラクルス州のトトナコ語人口は29,911人で，プエブラ州に関しては不明である。1940年代，シエラ・デ・プエブラ地方の諸村落における話者人口は以下である。ウエウエトゥラ市（5,954人），オリントゥラ市（5,600人），ウエイトゥラルパン市（4,069人）であった。低地のパパントラ市

2）Fernando Roldan Q., Situación Social, Simbolismo y Ritual en el Matrimonio Totonaca, Estudio en dos comunidades de la Sierra de Puebla, en（Gortari Krauss, de Ludka, y Jesus Ruvalcaba Mercado）*La Huasteca: vida y milagros,* Casa Chata, 1990; Chenaut, Victoria, La costa totonaca: divorcio y sociedad en el Porfiriato, en *Huasteca I,* 1993.（Ruvalcaba, Jesus y Graciela Alcala）SEP, *Huasteca II;* 1993; Escobar Ohmstede, Antonio, Causas y desarrollo del movimiento, en *Huasteca III,*（Ruvalcaba, Jesus y Graciela Alcala）SEP, 1993.; Garma Navarro, Carlos y Elio Masferrer Kan; Los Totonacos, en *Oriental,* INI, 1995, pp. 321-366; Escobar Ohmstede, Antonio, *Historia de los pueblos indígenas de México,* de la costa a la Sierra, las huastecas, 1750-1900, 1998.
黒崎充「地元のシンボルとしてのエル・タヒン遺跡」『共生の文化』研究３，2009年，123-130頁。
小林致広「「先住民文化遺産」の観光商品化――クンブレ・タヒンの事例から」『メソアメリカにおける先住民イメージの創出』神戸市外国語大学外国学研究所2009年，117-149頁。および，「タヒン・サミットとボラドール」2010年度ラテンアメリカ学会定期大会（京都大学於）研究発表レジュメ。

3）Harvey and Kelly, p. 638.

写真６．パパントラ市のカトリック教会と市庁舎遠景。教会前に見える高いポールはボラドール儀礼に使われる。(2009年12月，桜井撮影)

写真７．市庁舎前広場には，ディエゴ・リベラの弟子で先住民芸術家である Teodoro Cano Garcia の手になるトトナコ文化の発展を描く象徴的彫刻壁画が視線を集める。

写真８．T. Cano G. 作，同市丘陵頂に立つ石像ボラドール

写真９．トトナコ文化の象徴的テーマであるエル・タヒン遺跡，笑うトトナコ人の土偶，ボラドール，バニラの実などが描かれている（タヒン・ホテルにて）

写真10．トトナカ文化圏の特色を表す民族衣装の男女，ボラドール儀式，ピラミッド，聖マリア教会が描かれている（タヒン・ホテルにて）

の人口は17,722人であった。一方，50年後の1990年代の人口をガルマとマスフィレーに依拠すると，トトナカ語話者総人口は207,876人で，その大部分がプエブラ州とベラクルス州に住むことに変わりがないが，メキシコ市に3,520人，メキシコ連邦府に3,036人が居住する。その他キンタナロー（569人），トラスカラ（524人），タマウリパス（485人），カンペチェ（306人），イダルゴ（209人），ハリスコ（180人）と600人以下の数となるが，それだけメキシコ国内の移動が拡大したことが明らかである。地理的には山岳部と海岸部に二別できる。山岳部斜面にはトウモロコシと柑橘類が栽培されている。春は穏やかであるが冬季にはかなりの寒気がある。山岳部の以下の重要都市は現在ではイダルゴ州とベラクルス州に位置している。エスピナル，コシュキウイ（パパントゥラから１時間半の距離），ソソコルコ・デ・ゲレロ，ソソコルコ・デ・イダルゴ（一番山頂部），コユトラ，チュマトゥラン，コアツィントゥラ，ティウアトゥランなどである。山岳部の経済は農業で肉・果実・野菜を生産し，パパントラ市の商人と取引される。主産物の中でトウモロコシは自給用で，特産物としてバニラ，コーヒー，コショウ，パイナップルなどがあげられる。特にバニラは当該地域が原産地であり，品質が世界一であるにもかかわらず，現在ではマダガスカルにその地位を奪われ，逆に輸入する立場に代わっている。同市の海岸部には，ラサバナ，ポルトゥラ，グアシマ，カリサル，ボラドル，プエンテ・デ・ピエドラ，ポサベルデなどの諸都市がある。春・夏は湿潤熱帯気候で，９月から１月にかけて寒気が襲う。３月から８月はかなり暑く，４月５月は乾季であり，秋と冬になるとやっと過ごしやすい降雨があり，快適な季節となる。カリサルとグアシマ間は舗装道路であるが，ボラドルは未舗装。2002年にランチョ・プラジャとテニシュテペク間道路工事が始まり，メキシコ湾岸部に五つ星ホテルの建設が開始された[4)]。

ソソコルコ・デ・イダルゴ市の小学校教諭は子供たちがトトナコ語を話すと叱りつけスペイン語を話すように仕向ける。また山岳部と海岸部のトトナカ語には差異があり相互に通じない場合がある。都市部では出産率が減少し，少子化で教育を受けさせることを優先するが，山岳部では一言語話者の方が多い。最近の傾向として学問や仕事を続ける方を優先し，結婚したがらない女性たちが増えている[5)]。

２．歴史的背景

ハーヴェイとケリー（1969年）およびガルマとマスフィラーに依拠して，トトナカ地域の歴史的背景をスペインの征服，植民，現代と年代を追って以下，概説していくものとす

4）Ibid., p. 641.
Garma y Masferrer, 1995, p. 321. ガルマとマスフィラーはトトナカ語がマクロマヤ語に属すると，述べるが，マヤ言語に関するマイケル・コー資料にはトトナカ語に関しての言及はみられない。
Marlene Alvarado Sil, Isis, “Repartimiento de mercancias y sublevación en Papantla, Siglo XVIII”, Tesis de Licenciada en Etnohistoria, Esucuela Nacional de Antropología e Historia, 2005, pp. 51-54.
La imagen Agropecuaria, http://www.imagenagropecuaria.com 2010/11/13

5）Marlene, *op.cit.,* p. 61.

る。

2-1．征服と植民

アステカ帝国が拡大していた1450年から51年にかけてメキシコ中央高原は破滅的な異常気象に襲われ，冬に大雪が積もり，夏に大雨が降り，メキシコ盆地は大洪水に襲われた。食物を失った野獣が人間を襲うなど，難を逃れた多くのアステカ人が飢餓のないメキシコ湾岸低地のトトナカ王国に身売りして奴隷となって生き延びたこともあった[6]。

さて，テソソモク王の率いるアステカ王国は，チチメカ族の末裔でアステカ王家と親縁関係にあったネサワルコヨトル王の統治するテスココ王国と，新たにトラコパンに拠ったテパネカ族を加えて三市同盟を結び，広い範囲を征服し壮大な湖上都市テノチティトランを築きあげた。やがて，アステカ族は自分たちがアステカ・チチメカ族ではなく，神により選ばれた民「メシカ」と改称し，これが現在のメキシコ国家の名称となった。アステカ帝国の異部族支配は政治的統合というよりも，貢納を目的とした間接的統治であったので，被支配部族は独自の支配者や政治組織を維持していた。スペイン人到来時の国王モクテスマ二世（在位1502-20年）の時代には，現在のモレロス州，プエブラ州，イダルゴ州，ベラクルス州の大部分とオアハカ州，ゲレーロ州の相当部分を支配下におき，総面積は25万キロm^2にのぼり人口2500万を数えたと推定される[7]。

16世紀初頭において，メシカの三市同盟に服従し重い貢納を余儀なくさせられたトトナカ人は，トラスカラ人と組んでメシカ勢力に対抗するために，コルテスの率いるスペイン軍を好意的に受け入れたので，征服戦争に伴う損傷は他部族に比べると少なかった。しかし，トトナカの旧都センポアラの地において土着の神々の像が破壊され，キリスト教徒への改宗と教会税を強制される段におよび，彼らは混乱した。センポアラに初めてキリスト教教会が建てられ，1523年にフランシスコ会が高地を，その10年後にアウグスティヌス会が北西部のイダルゴ，プエブラ，ベラクルス三州の州境の地域に布教を開始し，魂まで征服されていった。さらに，旧大陸から持ち込まれた伝染病が沿岸部トトナカ人を襲い，その人口の90～95％が死亡し，山岳部では人口の70％が減少した。スペイン人は先住民の社会的構造を活用しつつスペインの政治政策を移植していった。従来の先住民首領にはスペイン人と先住民の仲介的立場をとらせた。トトナカ人にしてみれば，先スペイン期の三市同盟への貢納が，今度はスペイン王室と教会への納税に代わったのであり，先スペイン期の戦士と先住民神官は廃絶させられた[8]。

征服後，レパルティミエント制度（強制労働徴用制）とエンコミエンダ制度が布かれた。レパルティミエント制度は豊かな銀鉱脈が発見されたサカテカスやグアナフアト，パチュカ地方において開発が進み，中央部のメシカ族，オトミ族，トラスカラ族，プレペチャ族が強制的に移住させられ労役に就いた。しかし，鉱山のない当該地域ではレパルティミエ

6）国本伊代『メキシコの歴史』新評論，2002年，56-57頁。

7）国本，前掲書，50-53頁。大井邦明『消された歴史を掘る』平凡社，1985年，224-226頁。

8）Harvey and Kelly, p. 639.

ント制度よりも，むしろエンコミエンダ制度が征服者にとって活用された。エンコミエンダとはスペイン語で「寄託」を意味し，一定地域に住む先住民労働力を使用する権利と，彼らを保護しキリスト教徒に改宗させる義務を王権が私人に寄託した制度である。本来はイベリア半島における対イスラムからの国土回復戦争（711-1492年）の過程で生じた制度であった。スペイン国王はドミニコ修道士たちの報告を受けて勅令「ブルゴス法」（1512年）を発令し，先住民の奴隷化を禁止したが，征服者は自らの富の蓄積にこの制度を利用し，数十人から数千人におよぶ先住民を支配した。この制度は征服とその報酬に関する国王と征服者間の一種の契約であり，同時に征服者と被征服者の間に支配と被支配関係を規制する制度となった[9]。こうして，本来は先住民の権利を守るはずだったエンコミエンダ制度は，逆に搾取の手段となった。征服の後に流行病と過酷な労働を課せられ人口が劇的に減少した。先住民はトトナカパンの中でもスペイン人の手の届かない地域に逃げ込んだ。こうして無人となった先住民諸村をスペイン人が侵入し植民経営をしたのである。

16世紀末，人口が散在していた地域では，宣教師たちが先住民を集めてレドゥクシオンもしくはコングレガシオンと呼ばれる教化集落を作り，ヌエバ・エスパーニャの各地に再編成された先住民社会が現れた。そこではカトリック教義を理解させると同時に先住民相互の互助組織であるマヨルドーモとか，地域によってはコフラディアと呼ばれる信徒会が形成された。こうして植民地時代はスペイン生活様式と知識が地域レベルにまで浸透し，日曜日のミサに強制的に村人は参加させられキリスト教的生活様式に馴化していった[10]。この政策が効果をあげたとは必ずしも考えられないが，土着の政治組織は壊滅的になっていったことは確かであろう。かつて先住民首領は世襲的であったが，新しいコングレガシオン集落では選挙で首長が選ばれたからである。

この頃，スペイン人人口拡大に逆比例して先住民人口は激減し，無人化した土地はスペイン人の手に渡った。鉱山経営者は鉱山開発が停滞すると土地を資本としてアシエンダ経営を始めた。「財産」を意味するアシエンダは，自給自足の完結した農村部小世界であり，市場向けのトウモロコシ，綿花，サトウキビが栽培された。時代と地方により相違があるが，一般的にアシエンダは数千ヘクタールの広さを有する生産単位であると同時に，農村部ひとつの社会単位をなし，農地，遊牧地，山林，不毛地などを含みペオン（農奴）と呼ばれる労働者がアシエンダ内で自給自足の生活をした。アシエンダとペオンとの間には家父長的主従関係があり，債務関係を介して世代的に身分を拘束されることが多かった。17世紀に確立したこのアシエンダ制は，スペインからのメキシコ独立後19世紀に変革期を迎えたが，20世紀にいたるまで伝統的な経済・社会システムとしてメキシコ農村部を支配したのである[11]。当該地域のアシエンダ経営では砂糖のような換金作物が好まれ，同時に牧

9）国本，前掲書，74-75頁，105頁。

10）コフラディアに関しては，グアテマラのツトゥヒル・マヤの村を調査報告した拙著『祝祭の民族誌』（全国日本学士会，1998年，第２章コフラディア組織）および，『グローバル時代を生きるマヤの人々』（明石書店，2010年，第１章マヤ信仰とカトリックの二重奏）を参照されたい。

11）国本，前掲書，107-108頁。

畜経営がなされた。エンコミエンダ制度と異なりアシエンダでは，先住民は基本的に重い債務を負う賃金労働者として遇された。エンコミエンダ制度は支配・被支配関係を規制したが，少なくとも先住民の自給性を保持していた。しかし，アシエンダ制度になると，賃金労働を基本としたから，労働力確保のために他地域の先住民の移動や黒人奴隷が連れて来られた。

この傾向はトトナカパン全域で見られたのではなく，初期スペイン人と接触の多かった海岸部（南東部）が最も影響を受けて荒廃した。しかし，トトナカ語話者とその文化がいまだに現存しているということは，皮肉なことに当地は交通の便が悪く，金銀産出の鉱山がないので，スペイン人を惹き寄せる要因が少なかったからであろう。17世紀半ばになると，先住民村落は再編成され支配権力が分散された。17世紀から18世紀にかけては比較的静かな植民地統治がなされ，地形的にアクセスが困難であった山岳部では孤立した諸村落とパパントラ地域のトトナカ文化は，比較的自治的な村落形態の中で維持された[12]。

2-2．反乱，独立，現代

18世紀は旧植民地体制から脱却し，村落の人口回復による人口圧のために，アシエンダと隣接する村落との間で水利や土地をめぐって農民の反乱が各地で発生した時代であった。18世紀後半にはユカタン半島のマヤの反乱，鉱山地グアナフアトにおけるシプリアノの乱，プレペチャ族の決起，そしてメキシコ市のクリオーリョによるマチェテスの陰謀などが相次いでおこり「反乱の世紀」と呼ばれている。さて，当該地方のコシュキウイ（Coxquihui）のトトナカ人首領であったセラフィン・オラルテが率いる反乱軍が独立運動に参加し，政治的・軍事的に重要な位置を占めた。パパントラ地域ではスペイン人に対してトトナカ人が反乱を起こし，スペイン人に譲歩を迫ったが，一方，ミサントラの反乱（1808年）ではトトナカ人が大虐殺され壊滅的な敗北をした。1836年から２年間というもの，セラフィン・オラルテの息子マリアノ・オラルテをリーダーとして反乱が起きた。その動機は，当局による伝統的な聖週間儀礼の廃止を不満とすることであったが，実はこの伝統的慣習こそが彼らにとっては，エスニック集団としての社会的・象徴的再生産のために貴重な機会であったのだ[13]。

1821年にクリオーリョ出身の副王軍大佐イツルビデは最後の副王オドノフと「コルドバ協定書」を交わし，二人三脚で新国家建設を目指し，翌年には摂政職を設置した。植民地社会の根本的改革を唱えるイダルゴやモレロスの主張に対して，イツルビデは特権層を残し半封建的社会の温存を表明して独立を達成した。これを不満として，1822年12月にサンタアナが共和制への移行を要求して「ベラクルス綱領」を発して議会の再会を要求した。1823年にイツルビデ帝政を崩壊させた軍人による臨時政府は制定議会を開催し，独立国家の基本である憲法制定に取り組んだ。制憲議会は連邦共和制を主張する自由主義者と中央

12）Garma y Masferrer, p. 325.

13）国本，前掲書，129頁。Garma y Masferrer, p. 325.

集権体制を主張する保守派に二分した。連邦派はフランス革命とアメリカの独立革命の思想を受け，絶対主義国家の危険性を避け国家権力を分割することを唱え，アメリカ憲法とスペインの自由主義憲法（カディス憲法）を支持するクリオーリョとメスティソから成っていた。一方，大土地所有者，カトリック教会，軍人から成る中央集権主義者は急進的改革を避けて国民を統治すべきと主張した。こうした当時の中央集権主義者と連邦共和制主義者に二分された状況の中で，オラルテは巧みに先住民を操作したのであった[14]。

植民地時代から後代にいたるまで，トトナカパンは本部をプエブラに置くトラスカラ司教区に属していたが，サンタアナ大統領時代（1841-1855年）になると当該領域は分断され，メキシコ湾岸部地域はベラクルス州に譲渡され，政治的経過からトトナカ人は山岳部と沿岸部住民に二分された。また，プエブラ州は海路を絶たれ現在にいたっている。プエブラ高地民は自由主義者擁立側につき，テテロ・デ・オカンポ（Tetelo de Ocampo）を中心にフアン３人組と行動を共にした。フアン３人組とはいずれもフアンという名前をもつ以下である。すなわち，Juan N. Méndez（参議院議員），Juan Crisóstmo Bonilla（プエブラ州知事），Juan Francisco Lucas（政府軍シエラ高地軍長）のフアン３人組は，先住民へのスペイン語教育の普及，道路建設，通信制度の確立化，馬車道路の敷設などの重要政策を推進した。特に馬車道路建設により，メスティソ商人が先住民村落を対象に商売を推し進めることになり，経済的・社会的・文化的変化が生じてきた[15]。

1916年に軍人のフアン・ルカスが死ぬと息子がその立場を継続し1930年まで３人態勢を維持できたが，メキシコ革命はフアン３人組を弱化させた。トトナカ人はかつてスペイン人支配者からメスティソの手に落ち略奪された土地を奪還するために勇敢に戦い，メスティソ側を敗北せしめた。しかし，近代化で市場主義に変貌した時代において，メスティソ白人系はバリオス大統領の援助を受け私兵を雇い勢力を強固にした。1930年代のアビラ・カマチョ大統領時代になると，「土地境界規程法」制定により，次第にトトナカ人を追放し土地を再び取り戻し，先住民はその共同体の中だけに押し込められる形となった[16]。こうしてアビラ・カマチョ時代から現代にいたるまで，シエラ山岳部においてさほど大きな社会的・政治的変化は生じていない。20世紀になるとメキシコ湾岸部では石油の油田開発で石油産業が開花し雇用機会が増大した。しかし，国内移動民や先住民への雇用機会は僅少であった。

３．民　　族　　誌

当該地域の生業，社会組織，交通，親族組織，宗教，年事歴など主にハーヴェイとケリーを引用して概説的に以下述べていく。

14）Garma y Masferrer, Ibid., p. 325.
15）Ibid., p. 325.
16）Ibid., pp. 325-326.

3-1．生業，社会組織，交通

基本的に彼らは農民である。トウモロコシ，カボチャ，インゲン豆は低地では成育が悪く，唐辛子は高地では育たない。現金収入を得るために小規模ながら養豚や養蜂をする。シエラ高地では一毛作なので，農閑期になると男たちは行商人になったり低地で農業労働者として収入を得る。低地は二毛作で土壌は肥沃であるから，トウモロコシ，バニラや家畜用飼料，屋根材となる植物などを栽培する。ここで，トウモロコシ＝バニラ栽培のローテンションに注目したい。まず農民は森林を伐採しトウモロコシ耕作用地を焼き畑にし，４年間ほど耕作した後で畑を放置する。すると畑には灌木が生えてくるから，この灌木にツル科のバニラを植えて12年間ほどバニラ栽培で収穫を得る。こうしてトウモロコシ＝バニラ耕作を20から25年ほどしてから，完全にその土地を休ませるのである。４月末から５月初旬にかけて３週間ほどバニラの花が咲き，人工授粉をしてから莢が熟すのは12月頃であるが，まだ青い10月頃に刈り取りいれをする（写真11，写真12）[17]。

森林伐採は４月から６月にかけて行われ，40人ほどの男たちが互助労働で焼き畑作業を行う。１家族につき約1.5ヘクタールを自給用の作物栽培をする。最初の収穫が６月末から８月にかけて，次の収穫は11月末から２月上旬にかけてである。ミルパ（トウモロコシ畑）は家から距離的に遠くにあるので，自宅周囲に家庭用菜園があり，そこに果樹やサトウキビ，マニオク，唐辛子，棉，薬草，花卉などを栽培する。

当地の食料は質素で，炭水化物の摂取量が多く蛋白質やビタミン豊富な食物は不足がちである。牛肉や豚肉は豊かな家庭では週に一度，貧しい家では月に一度しか食卓にあがらない。七面鳥や鶏肉は祭事食に使われる。山岳部のエロショチトゥラン（村）には３バリオがあり，バリオ内婚は忌避される傾向がある。息子は父親のバリオに所属するから男系ラインによる構成には安定性があり，バリオへの忠誠心を抱くことになる。未婚女性は父親のバリオに属し，結婚すれば夫のバリオに属することになる。バリオ組織活動は主に共同作業の折りに発揮される。高地のアウアカトォラン市のメスティソ行政の影響があるものの，マヨルドーモ選出や教会や国の共同作業の際には，先スペイン期の宗教的・行政的組織の名残が見られる。この共同作業組織はかなり複雑にこみいっており，男性は16歳頃になると教会の使い走り役から始め，18歳頃になると既婚したり，政治的任務の末端を勤め始める。一方，エル・タヒン地域ではこうした政治的構造は厳格ではない。公共広場の草刈り清掃などファエナと呼ばれる共同作業は世帯主の男性によってなされる[18]。

【親族組織・キンシップ】

現代トトナコ社会の基本的構造はそれほど地域的偏重があるとは言えない。父方居住婚であり，低地では土地相続は男系でなされる。父方拡大家族が伝統的な単位で現在にいたるが，最近の傾向として若夫婦を中心とする独立核家族形態が主となり，社会関係では親族よりも，むしろコンパドラスゴ制度や友人ネットワークの方が紐帯を深めているようだ。

17）Harvey and Kelly, p. 645.

18）Ibid. p. 671.

写真11．乾燥バニラの莢をネックレス，ロザリオ，ストライプ，お守りなどに加工して売店に並べるパパントラ市民。

写真12．当該地域原産のバニラの実は，甘い香りが菓子・香料用輸出産品として名高い。

婚姻関係を見ていくと，花婿の両親が花嫁宅に表敬訪問を４回し婚約に至る。結婚費用は主に花婿側が担うが，時には知らない相手同士で両親間で婚姻が取り決められることもあった。高地のでは初潮前の娘が10歳前後の少年と結婚する事例があるが，これは嫁不足と早期婚約の風習から来ている。一方低地では結婚１年前ほどが婚約時期であり，両地域において娘の処女性が求められた。結婚形態には高地と低地の間に相違がある。高地では一夫一婦制がされているが，低地ではしばしば一夫多妻婚がみられるが，それは農夫一人当たりの生産量が拡大家族もしくは第二夫人の協力で高めることが可能となるからであろう。高地に比較すると低地における婚姻形態は不安定である。山岳部では第二イトコ婚が望まれるが，低地ではその傾向は少ない。しかし，両地域ともにレビレート婚やソロレート婚が広く認められる。低地共同体にはバリオ組織が無いが，花嫁は常に距離的に近い共同体から選ばれるのでローカルな外婚が好まれている。儀礼的親族における婚姻は両地域とも禁じられている[19]。

婚姻の宴には音楽と踊りが付きものであり，招待客にはラッカー彩色塗りの椀，ヤシの葉で編んだマット，木製色塗り盆などが贈られる。花婿側に余裕があれば花嫁に金製アクセサリー（指輪，ネックレス，イアリング，金貨）や衣装（オーガンジーのスカート，ブラウス，ケシュケミトル，ヘアリボン），靴，傘などが贈られる。これらをパパントラ市で購入すると花婿側は次週の土曜日に花嫁宅を訪問し，そこで食事の招待を受け，贈り物をする。こうして四旬節を除き教会での挙式の日取りの調整に入る。さらに婚約期間中に花婿は義父の農耕を手伝い食物を贈る。パパントラ市の教会で挙式と婚姻届を済ますと，村落共同体に戻り一晩中を踊り明かす。この地域では駆け落ち婚は花婿側に婚資が無いとか，花嫁側の理解を得られない場合を除きめったにない。新婚旅行にはパパントラ市に向かうことが多い。一方，高地にはこのような贈り物の習慣は見られないようだ[20]。

マーリーンの2002年調査によれば，海岸部は気温が高く湿潤なので以下の作物ができる。柑橘類は１トンあたり400から500ペソの価格で10から12トン単位で売られる。富農家はトラクターで耕作し，農業労働者を日給60ペソで雇うが，これで４人家族を扶養するのはぎりぎりの線だ。トウモロコシは二毛作で，キロ1.5ペソで，むしろ，トウモロコシの葉のほうがマッチの原料となり，キロ当たり８から10ペソの価格がつく。インゲン豆は三毛作

19）レビレート婚（levirate）とは，夫が死亡したときに妻がその兄弟（多くは弟）または，近親者と再婚するように社会的に求められており，また，ソロレート婚（sororate）とは妻が死んだ場合残された夫が妻の未婚の妹，あるいは他の近親女性と再婚する慣習であり，マードックの調査では159社会の内100社会で好ましいとされる。当初の婚姻により成立した親族集団間の結び付つきを維持するに行われていると解釈できる。「精神的儀礼的親子関係」とはライベリア半島やテンアメリカのカトリック教徒の間に広く見られるコンパドラスゴ制度を指し，実父母と代父母間の関係に伴う慣行を言う。洗礼，堅信，婚姻など重要な人生儀礼の節目に代親と代子は「親族」なるがゆえに，婚姻の回避とタブーが守られた。一方，互助互恵関係は実利面で活用された。ラテンアメリカの農民社会で伸張し，政治経済的に底辺にある人々を擬制的に親族として組み込んだ。前産業型の社会の一形態ともみなされている。

20）Harvey and Kelly, pp. 667-668.

でキロ８ペソの価格だ。その他，ピピアン（カボチャの一種），プラタノ，杉板などが商品である。牧畜業には投資するための財力が必要とされ，役所への登録義務や当市の畜産協会に参加する必要がある。プエブラ州と当市の商業関係は古代から現代まで継続している。柑橘類はパパントラ市の「コヨーテ」が購入しポサリカ市に輸送すると，そこからメキシコシティの買い手が高値で購入してくれる[21)]。

3-2．宗教，祝祭，年事暦

シエラ山岳部にはまだ古い宗教観が残っている。第四の太陽，洪水による世界の終末，一人の男性と一匹のウサギが生き残る。高地と低地の相違，どうして鳥は赤い頭をしているのか，蟻はどうして細いウエストをしているのかなど自然現象への説明がされている。ポポル・ウフ神話というマヤ神話を回想させる話もある。聖ミゲルと雷，雨，風の神が関連している。大地は４つの丘陵にたつ４人に支えられていると考えられている。主な儀礼としては，炉の母神への慰撫儀礼は子供の誕生と成人の時になされる。幡種と収穫，および新築儀礼においては，一羽の七面鳥が生贄にされ，その鮮血はコパル香に注がれる。新築家屋儀礼には若い雄の七面鳥が生贄として床下に埋められたり，香とロウソクの煙の中で供物（お神酒，タマル，タバコ，コーヒー，パンなど）が祭壇にベンケイ草と共に捧げられる。聖なる数字は４，７，９である。アステカ神話に類似した伝承や動物譚などがある。宇宙観としては，大地は水平で天界はドーム型であり，毎日太陽は西の地下に沈み翌朝東から昇る。世界の西端は「エルサレム」と呼ばれ，毒蛇で死亡した人，踊り手，楽師，助産婦，産褥死の女性などが住んでいるとされる[22)]。

当該地域の主たる祝祭についてみていくと，エロショチトゥランの大祭はカトリック教会でマヨルドーモたちにより開催されるが，御公現の日（１月６日）とコルプス・クリスティの祭日には共同体が主催する。祝祭時には，アウアカトゥラン市から司祭がミサを挙げるために来村し，聖人像行列が村を巡わる。こうしたパブリックな祝祭儀礼に比べると，播種儀礼や赤子の誕生に伴う炉の洗浄儀礼は，悪霊を祓うためであり先住民的要素が濃厚で土地のシャーマンにより行われる。成人式儀礼や新築祝いには大勢の人々が集まり，シャーマンに楽師が加わり，数組の既婚者たちが参加し，踊り飲み明かす。結婚式はアウアカトゥラン市の教会で行い，披露宴は村で行われ，花婿の両親や名付け親の財力によって招待客の数や宴会食に差がでてくる。初潮を迎えた娘は民族服か洋服のどちらを選択するか，それは好みによる。また娘一人の外出は禁止に近い時もあった[23)]。

人間には12の守護動物がいて，その内の４匹が主で，さらにその内の１匹の動物が傷ついたり死ぬと人間にも害があると考えられている。また，人間は２つの魂をもっており，一つは頭にもう一つが心にあるとされていて，頭の魂は夢に現れ，時には悪い空気にとりつかれる。死ぬと２つの魂は身体から脱け出し，子供の魂は直接天国に行き，再び産まれ

21）Marlene, Ibid., pp. 56-57.
22）Harvey and Kelly, p. 671.
23）Ibid., p. 671, p. 676.

てくる。成人した人間の魂は死ぬと地下界に行く。地下界は地上界と類似しているが昼と夜が逆転する。時間が経過すると魂は再生される。しかし，殺されたり溺死したり産褥死したりすると再生することは無い。彼らは常に古い雷の伴侶とされる。男は妻帯せずには死後の世界にはいけないとされ，婚約者の死には，棺の中に婚約相手の身代わりとして司祭により聖別されたロウソクが入れられる。遺体は洗い清められた後，新品の衣服を着せられ，それまでの着衣は棺に入れられ，トルティリャ７枚，水瓶１本，銅貨14枚などが副葬される。エル・タヒンのトトナカ人によれば，死者の魂は死後９日間は家から離れることはないが，死後80日が経つと人々は食物を死者に供えることを止める。死後，魂の行き場所には混乱がある。高地では未婚の死者にはロウソクが伴侶の代わりに遺体の脇に置かれ，小トルティリャ12枚，水筒，ザリガニ１匹が副葬される。家族や友人には食事や飲み物が饗される。死後４日目と９日目には詠唱者が呼ばれ，払浄儀礼が家族と友人たちのためになされる。そして80日目で終わる[24]。

年事暦を見ると，主な祝祭はご公現の日（１月６日），守護聖人サンマルコスの祝日（４月25日），コルプス・クリスティ，ご聖体の祝日（移動祝日），処女カルメン（７月16日），サンサルバドル（８月６日），処女ロサリオ（10月７日）などの祝日である。春にはサンホセ像が降雨を願って共同体を訪れる。11月の死者の日になると各地に散らばっていた家族が戻り，結婚式や葬式のときと同じように祭壇を作り供物を供え，楽師を雇う。春先の乾季になると小川の水が枯れてくるので，女性は遠くまで水汲みに行くが，男性は魚釣りが容易になる。壺作りは死者の日と三月中旬の間に集中して焼かれる。それはその時期であれば，気温と湿気が土器の乾燥に良いからである[25]。

3-3．他部族との関係

ナワとトトナカのようなエスニック集団の関係は歴史的に常に紛争問題を抱えてきた。三部族同盟がトトナカ人を抑圧し，サカトラン地域ではトラスカラ出身のナワ人が多く居住した。スペイン人の征服侵略が激化すると難を逃れたナワ人がトトナカパンへと進んだ。テテラ・デ・オカンポ地方では三部族同盟のナワ人によって文化的にもナワ化され，植民地時代を経てもナワ化が継続した。オトミ語とテペウア語集団はパウアトゥラン市に住みつき，特に後者は文化的にも言語的にもトトナカ人に近似していた。植民地時代，スペイン人はボカコスタと呼ばれる山岳地帯に定着し，そこではナワ人が多数を占め，トトナコ人村落は16を数えただけである。当該地域の伝統芸能に「黒人の踊り」があるが，これはスペイン人補充兵として黒人が連れて来られ，時代の経過とともに黒人と先住民の関係が生じたからであろう[26]。

当該地域におけるスペイン系混血とトトナカ人は二段階を経て文化的混淆化が進んだ。第一段階として19世紀，経済的中心都市としてテシウトゥラン，サカポアシュトゥラ，テ

24）Ibid., p. 679.
25）Ibid., 678.
26）Garma y Masferrer, Ibid. p. 338.

テラ・デ・オカンポ，サカトゥラン，ウアウアチナンゴなど５市出身の自由主義的思想を持つ教諭が教育を促進し文化変容が進んだ。第二段階として，前述教諭とセットになって商業ティアンギス・システムが村レベル内にまで浸透した。また，シコテペク・デ・フアレス地帯のように，他州農民が政策的に農地を与えられると，今度は先住民が土地を失うなど，エスニック集団相互および階級相互間で紛争が絶えない。さらに，19世紀，20世紀を通じてスペイン語教育が浸透し二重言語話者が激増した。先住民語話者が減少しトトナコ語を話せないが，エスニック・アイデンティティはトトナカ人であると自認するものが現れている。1950年代までに夏期言語学校（ILV）やペンテコステ派などのプロテスタント布教が始まり，特に夏季言語学校はエスニック・アイデンティティに関わる影響を及ぼした。一方では，トトナカ人の象徴的システムを断絶させ文化変容を迫ったが，また他方では，聖書の先住民言語翻訳と伝道により先住民出身の伝道者が育成され，彼ら自身が主体的に先住民言語を見直し，自身のアイデンティティを強化させることになった。さらに時間的に遅れてカトリック教会は，布教戦略としてトトナカ人のアイデンティティと組織の確立に力を貸した[27]。

1978年，メキシコ政府は二言語教育プログラムを推進し，先住民庁（INI）や Conasupo や国立コーヒ学院（Inmecafe）などの先住民経済に優遇的な機関の協力をもとに，トトナカ人に社会的・経済的そしてエスニック上の位置づけを強化した。そうした面ではメスティソ側もエスニックなコントロール面で道を譲らざるをえなかったのである[28]。

【エル・タヒン地域】

パパントラ市から南西部に７km. に位置するエル・タヒン低地共同体は，熱帯雨林の丘陵地帯に位置している。全人口1,102人の80％は相互に見えない距離に拡散して居住している。残り20％は遺跡から南に徒歩数分に位置する町に住んでいる。当地には世界遺産のエルタヒン遺跡が在りながら，現共同体の正式な設置は比較的最近である。メキシコ政府の計画によりタヒン地域は約 31 hect. ごとに分割され107区画が存在し，パパントラ地域のトトナカ人に購入された。タヒン中心部は広く東端に向かっているが，これは明らかに先スペイン期のセンポアラ遺跡やキアウイシュトゥラン遺跡と同様に中央広場の特徴に類似している。タヒンの中心部は 1250 m^2 ごとに区画され，役場，学校，監獄などの公的建物がある。農夫であるトトナカ人は畑地に近いところに家を立てるが，中心部に住む住民の半数以上が耕作地を所有せず耕作地をレンタルで借りる。タヒンの全区画の４分の１は１所帯が占めている。１区画を占有できる家族の最大数は８人である。１区画に複数世帯が住むことになると男系ラインが優先される[29]。

高地には耕作に適した畑地が不足であり，さらに悪いことには隣接地域に住むメスティソがローカルな財産を貪欲に買い取っていく姿が見られることだ。1951年，エロショチトゥランの地は公的には共有地であった。しかし現実には小規模な個人的使用者が多く，５

27）Ibid., pp. 338-339.

28）Ibid., p. 339.

29）Harvey and Kelly, pp. 647-648.

～６人だけが生産性の低い25～30ヘクタールを持ち，その面積はタヒンの標準的区画よりも小さなものである。20年前，低地の肥沃な土地の所有者はトトナカ人であった。その当時ですら幾つかの共有地がパパントラ地域には存在したが，エル・タヒン地域はそうではなかった。メスティソがトトナカ人の土地を手に入れ広い土地を牧草地用に変えた。今日エル・タヒン地域には土地無し家族が増え，次世代にはもっと状況が厳しくなるであろう[30]。

あ　と　が　き

世界遺産となった遺跡を訪れる観光客の多くは，この小規模ながら活気にあふれるトトナカ文化の旧都か，近年メキシコ湾岸部のテコルトゥラに建設された近代的ホテルに宿泊する。ユカタン半島のマヤ文化圏におけるムンド・マヤの観光化が大々的な国家策として建設され，カンクン国際空港は欧米と直結し，世界中から観光客が「神秘で謎のマヤ文化圏」を周遊する。一方，同じ世界遺産として登録されたエル・タヒン遺跡（1992年）をめぐる観光化対策は，ユカタン半島に比較すると問題にならないほどローカルで「遅れている」。しかし，このローカルな世界遺産周辺のトトナカ文化とワステカ文化地域には，メキシコ史の忘れられた貴重な文化的断片があるようだ。先住民の建築した遺跡は誰のものなのか？　今後も，当該地域に関する文献資料をさらに収集し，フィールド調査を進め，考察していいくことが大きな課題である。

謝辞

本号発刊にあたり，本学から研究と指導に専念できる環境を提供していただいたことに深く感謝しております。と同時に，当論集の寄稿者と本学の関係を簡単に紹介し謝辞を述べておきたい。まず，共著者の考古学徒・黒崎充さんは，私がスペイン語語学研修先に決めたベラクルス州立大学で，日本語講師として受講生を激増させ，彼の指導によりメキシコ・日本語弁論大会で受賞した学生は国際交流基金で訪日し，本学を表敬訪問し交換留学の機運を促進させてくれた。ハラパ市在住の小林ラウラ・泰晴先生やパパントラ市在住の彫刻家・五次勝さんには大変お世話になった。中部大学・杓谷茂樹教授（マヤ考古学）とは科研（吉田栄人・東北大学准教授代表）で長年ユカタン半島マヤの調査研究を共にし，本学大学院では観光人類学分野で講義をご担当いただいている。私の留学中（2000年）に出会った中原篤史氏は，本学経済学部（黒田勇ゼミ）の卒業生で在グアマテラ日本大使館に勤務されていた。その後，彼は神戸大学大学院博士課程へと進学し，ラテンアメリカ関連事業の仕事に勤務し貴重な体験を帰国の度に後輩学生に語っている。最後に天理大学イスパニア科から本大学院人間科学研究科に進学しメキシコ国費留学試験に合格し，現地でフィールド調査をして帰国した長谷川来夢さんにとって，本誌への投稿は千載一遇の機会であり関係者に感謝している。マヤ文化圏で長く調査研究をしてきた私にとって，ワステカ・トトナカ文化圏に関しては初学に近いが，メキシコ社会人類学高等調査研究所 CIESAS, D.F. の Ruvalcaba, Zevallos 両教授による現地調査参加機会の提供が小論執筆の動機付けにもなっている。

30）Ibid., p. 648.

参考文献

大井邦明
1985年　『消された歴史を掘る』平凡社。
国本伊代
2002年　『メキシコの歴史』新評論。
黒崎　充
2003年　「メキシコ湾岸地方におけるユーゴについて――ベラクルス州中部地方における発掘調査資料を中心として――」,『山口大学考古学論集』近藤喬一先生退官記念事業会，山口，407-422頁。
2009年　「地元のシンボルとしてのエル・タヒン遺跡：先スペイン期の遺跡と現代における遺跡活用について」,『共生の文化研究３』愛知県立大学　多文化共生研究所，愛知，123-130頁。
小林致広
2009年　「「先住民文化遺産」の観光商品化――クンブレ・タヒンの事例から」『メソアメリカにおける先住民イメージの創出』神戸市外国語大学外国学研究所，117-149頁。
桜井三枝子
1998年　『祝祭の民族誌』（全国日本学士会），京都。
2003年　「テネク・マヤ（ワステカ）文化に関する予備的研究」『大阪経大論集』第53巻第５号，245-272頁。
2010年　『グローバル時代を生きるマヤの人々』明石書店。
Arellanos Melgarejo, Ramón
2006　*Las Higueras* (*Acacalco*) ***Dinámica cultural,*** Bibliotea Universidad Veracruzana, Xalapa, Ver., México.
Arellanos Melgarejo, Ramón y Lourdes Beauregard
1981　"Dos palmas totonacas. Recientes hallazgo en Banderilla, Ver." en *La Palabra y el Hombre,* Revista de la Universidad Veracruzana, Nos. 38-39, Nueva Época, Xalapa, Veracruz.
Brüggemann, Jürgen K.
1994a　"La ciudad de Tajín", en ***Arqueología Mexicana*** Vol. I, Núm. 5, dic-ene 1994, Editorial Raíces, México, D. F., pp. 26-30.
1994b　"Tajín en números", en ***Arqueología Mexicana*** Vol. I, Núm. 5, dic-ene 1994, Editorial Raíces, México, D. F., p 57.
2001　"La zona del Golfo en el Clásico", en *Historia Antigua de México,* Vol. II: El horizonte Clásico, Linda Manzanilla y Leorardo López Lújan coordinadores, Consejo Nacional para La Cultura y Las Artes, Instituto Nacional de Antropología e Historia, Coordinación de Humanidades de la Universidad Nacional de Autónoma de México, México, D. F., pp. 13-46.
Castillo Peña, Patricia
"Un proyecto regional en El Tajín", en el IV Foro Académico de Investigadores Centro INAH Veracruz, en el Museo de la Ciudad Coronel Manuel Gutiérrez Zamora, Veracruz el 5 de diciembre de 2008, Veracruz
Chenaut, Victoria,
1993　"La costa totonaca: divorcio y sociedad en el Porfiriato", en *La Huasteca I: Espacio y tiempo*

Mujer y trabajo, Jesús Ruvalcaba M. y Graciela Alcalá coordinadores, CIESAS, D. F.

Cortés, Jaime

1994a "Filo-Bobos" en *La arqueología mexicana en el umbral del siglo XXI: proyectos especiales de arqueología,* Consejo Nacional para la Cultura y las Artes, Instituto Nacional de Antropología e Historia, Museo Nacional de Antropología, Fonfo Nacional Arqueolígico, México, D. F., pp. 24-26.

1994b *Filo-Bobos,* Salvat, Instituto Nacional de Antropología e Historia, México D. F.

Escobar Ohmstede, Antonio

1993 "Causas y desarrollo del movimiento olartista en Papantla, 1836-1838", en *Huasteca III, Movilizaciones campesinas,* Ruvalcaba M., Jesus y Graciela Alcala coordinadores, CIESAS, D. F.

1998 *Historia de los pueblos indígenas de México,* CIESAS, D. F.

Fernando Roldan Q., L.

1990 "Situación Social, Simbolismo y Ritual en el Matrimonio Totonaca, Estudio en dos comunidades de la Sierra de Puebla, en *La Huasteca: vida y milagros,* Gortari Krauss, de Ludka, y Jesus Ruvalcaba M. coordinadores, Casa Chata.

García Payón, José

1949 "Notable Relieve con Sorprendentes Relaciones" en *Uni- Ver,* Año I- Tomo I, Núm. 6, Jalapa, pp. 351-359.

1950 "Palmas" y "Hachas "Votivas en *Uni- Ver,* Año II- Tomo II, Núm. 14, Jalapa, Veracruz, pp. 63-66.

1951 *La ciudad arqueológica del Tajín,* Contribución de la Universidad Veracruzana a la reunión de Mesa Redonda de Antropología, Xalapa, Ver.

1990 "Evoloución hisórica del Totonacapan", en *Huaxtecos y totonacos,* Lorenzo Ochoa coordinador, Consejo Nacional para Cultura y las Artes.

Garma Navarro, Carlos y Elio Masferrer Kan

1995 "Los Totonacos", en *Oriental,* INI, pp. 321-366.

Gobierno del Estado de Veracruz.

1992 *Atlas Geográfico del Estado de Veracruz, México,* Secretaría de Comunicaciones, Gobierno del Estado de Veracruz, Xalapa, Veracruz.

Harvey H. R. and Isabel Kelly

1969 "The Totonac", in *Handbook of Middle American Indians,* Vol. 8, Etnology, Part 2, University of Texas Pres, Austin; 1969, pp. 638-681.

Krickerberg, Walter

1990 "Consideraciones histórico-cultrales de los totonacos" en *Huaxtecos y totonacos,* Lorenzo Ochoa coordinador, Consejo Nacional para Cultura y las Artes.

Kroster, Paula H. y G. R. Kroster

1990 "La forma de vida en El Tajin", en *Huaxtecos y totonacos,* Lorenzo Ochoa coordinador, Consejo Nacional para Cultura y las Artes.

Lorenzo Ochoa

1990 *Huaxtecos y totonacos,* Consejo Nacional para Cultura y las Artes.

Marlene Alvarado Sil, Isis,

2005 "Repartimiento de mercancías y sublevación en Papantla, Siglo XVIII", Tesis de Licenciada en Etnohistoria, ENAH.

Medellín Zenil, Alfonso

1960 *Cerámicas del Totonacapan, Exploraciones arqueolígicas en el centro de Veracruz,* Universidad Veracruzana, Instituto de Antropología, Xalapa, Veracruz.

1975 *Napatecuhtlan,* Editora del Gobierno de Veracruz, Xalapa, Veracruz.

Molina Feal, Daniel

1980 Conservación y restauración de edificios arqueológicos, Cacaxtla y Yohualichan, dos casos, Tesis de licenciatura en la Escuela Nacional de Antropología e Historia, México, D. F.

1986 "La arquitectura de Yohualichan, Puebla", en *Cuadernos de Arquitectura,* División de Estudios de Posgrado, Facultad de Arquitectura, Universidad Nacional de Autónoma de México, México, D. F., pp. 51-57.

Muños, Juan Carlos

1998 *Filo-Bobos,* JGH Editores, S. A. de C. V., México, D. F.

Navarrok Carlosk, Garma,

1987 *Protestantismo en una comunidad totonaca de Puebla, Mexico,* INI.

Ocampo Goujon, Ángel Sebastián

2002 "La estructura S-9 (Edificio del Dintel) de Vega de la Peña, Veracruz" Tesis de Licenciatura en Antropología, Facultad de Antropología Universidad Veracruzana, Xalapa, Veracruz.

Palerm, Angel

1990 "Las zonas naturales del Totonacapan, Etnografia antigua totonaca en el oriente de México", en *Huaxtecos y totonacos,* Lorenzo Ochoa coordinador, Consejo Nacional para Cultura y las Artes.

Piña Chán, Román y Patricia Castillo Peña

2001 *Tajín La ciudad del dios Huracán,* Fondo de Cultura Económica, México, D. F. (1999 primera edición).

Proskouriakoff, Tatiana

1953 "Scroll Patterns (entrelaces) of Veracruz" en Ignacio Bernal y E. Dávalos Hurtado (eds.), Huastecos, Totonacos, y sus vecinos, *Revista Mexicana de Estudios Antropológicos,* 8, pp. 349-401.

1954 Varieties of Classic Central Veracruz Sculpture, *Contributions to American Anthropology and History* 58, Carnegie Institution of Washington, Washington.

1971 Classic Art of Central Veracruz, Gordon Ekohlm and I. Bernal eds. *Handbbok of Middle American Indians,* Vol. 11, Part 2 Archaeology of Northern Mesoamerica, R. Wauchope General editor, University of Texas Press, Austin, pp. 558-572.

Ruiz Gordillo, Omar

1984 "La arquitectura prehispánica de Coyoxquihui", *Cuadernos de Arquitectura,* División de Estudios de Posgrado, Facultad de Arquitectura, Universidad Nacional de Autónoma de México, México, D. F., pp. 63-67.

1999 *Paxil La conservación en una zona arqueológica de la región de Misantla, Veracruz,* Serie

Conservación, Instituto Nacional de Antropología e Historia, México, D. F.
Proyectos arqueológicos Yohualichan y Castillo de Teayo, Ponencia presentada en el 5º Foro de Investigación INAH Veracruz, Universidad Veracruzana, del 10 a 12 de Noviembre de 2010, Xalapa, Veracruz.

Sahagun, Bernardino de
1990 ¿Quiénes eran los totonacos?, en *Huaxtecos y totonacos,* Lorenzo Ochoa coordinador, Consejo Nacional para Cultura y las Artes.

Spinden, Ellen S.
1933 "The Place of Tajin in Totonac Archaeology", en *American Anthropologist,* Vol. 35, No. 2 New Series, pp. 222-270.

Stark, Barbara
1998 "Estilos de volutas en el periodo Clásico" en Evelyn Childs Rattaray ed., *Rutas de intercambio en Mesoamérica III Coloquio Pedro Bosch-Gimpera,* Universidad Nacional Autónoma de México, Instituto de Investigaciones Antropológicas, México, D. F., pp. 215-238.

Wilkerson, S. Jeffrey K.
1987 *El Tajin A Guide for Visitors,* Universidad Veracruzana, Xalapa, Veracruz.
1990 "Presencia huasteca y cronología cultural en el norte de Veracruz Central, México", en *Huaxtecos y totonacos,* Lorenzo Ochoa coordinador, Consejo Nacional para Cultura y las Artes.
1991 "And Then They Were Sacrificed", Vernon L. Scarborough and David R. Wilcox, Eds. *The Mesoamerican Ballgame,* The University of Arizona Press, Tucson, pp. 45-71.

Wonerly, William L.
1990 "Sobre la propuesta filiación linguística de la familia totonaca con las familias zoqueana y mayense, en *Huaxtecos y totonacos,* Lorenzo Ochoa coordinador, Consejo Nacional para Cultura y las Artes.